

たことが推測できうることになる。

加えて先に引用した譬喩者の例は、内容的に北伝仏教に於ける上座部、大衆部の根本分裂を引き起こしたと伝説される大天の説話に類似することが指摘できる。周知の如く、大毘婆沙論第九十九卷引用の因縁は、マトゥラー国の商主の子として生まれた大天が、父の留守に母と交わり、母と共に父を殺し、パータリプトラに逃れた後、故郷の比丘に逢い、露頭を恐れこの比丘も殺し、さらに母が他の者と交わったのを見て、この母も殺した。この結果、仏教に帰依、阿羅漢として、大天の五事々を説いたので、当時の仏教界に大きな衝撃を与え、上座部、大衆部の根本分裂の原因となったのである。この大天の母が、大天にとり色々の女性になりうることから考えて、譬喩者の例話と共通の要素が指摘できる。

又、大天が主張する五事の「餘所誘無知 猶豫他令入 道因声故起 是名真仏教」の内、煩惱の漏失は無いが阿羅漢も夢で天魔に嬖せられて、不浄の漏失を許す第一事の「余に誘わる」は、思想的に旧訳毘婆沙論の理解する犢子部説、譬喩者の説く「境の実体無し」に極めて類似した考え方と言わなければならない。この様に大天の問題と今回検討した新旧両毘婆沙論の相違との間に関係を見出すことができると思えば、初期仏教解明のさらに大きな問題へと展開する可能性を秘めていると言いうことができるだろう。

『釈浄土群疑論探要記』の書誌学的考察

村上 真 瑞

『釈浄土群疑論探要記』について、現在様々な書誌学的研究成果が、出されているが、版本写本について、注釈書も含めて、現在知り得るものについて、実際現物を確かめることによって、その存在を裏証してみたい。

そこで『釈浄土群疑論探要記』一四巻について、最も新しい研究成果を紹介されている『日本仏教典籍大事典』（昭和六十一年十一月刊）によって考察してみよう。

『釈浄土群疑論探要記』（しやくじょうどぐんぎろんたんようき）一四巻。一（中略）一（版本に寛永十一（一六三四）年版および同二二年版がある。『浄全』6所収（初版明治四二年刊）のものは後者の本と手沢の善本を校合し、再版本ではさ

らに大鹿愍成師の手沢本と再度校勘されている。〔末注〕『探要記考』一四巻（正大・谷大）〔所載〕浄全6。〔参考〕浄全21（解題）、浄土宗典籍研究。

〔金子寛哉〕

と示されるところにより、現在における最新の『釈浄土群疑論探要記』の研究情報を理解することができるのである。因みにここにおいて、版本は寛永十一年と、二十一年との二本、また、末書については、『釈浄土群疑論探要記考』一四巻が存在することを確かめることができるのである。

次に『仏書解説大辞典』（昭和十年刊）によると、

寛永一一刊（谷大、宗大・一二九）寛永二刊（正大・一五三一・二七三―二七四）（龍大、二〇三・二七）

と記され、また、『国書総目録』（昭和五十二年刊）によると、

『釈浄土群疑論探要記』一四巻

現存、撰者道忠（一弘安四、AD一二八一）

写本、大正、版本、大谷、京大、早大、大正、東洋大哲学堂、龍大、逢左、無窮平沼、活字本、浄土宗全書六卷^③

と記されているように、これらの目録によると、写本が大正大学にあり、版本には、寛永十一年刊と、寛永二十一年刊との二種類があることが理解されるのである。さて、これ以外の版本として、『佛教大学図書館所蔵和漢書中浄土宗学関係書籍目録稿』の中には、

釈浄土群疑論探要記 十四巻 道忠 宝暦十三 吉野屋権兵衛刊 天一四八^④

と記されるように、宝暦十三年版の存在が見出されるのである。これによって、版本は、全部で三種類あることとなるのである。

次に、『釈浄土群疑論探要記』の末書について考察してみたい。『仏書解説大辞典』によると

釈浄土群疑論探要記考 十四巻 存 写本（谷大、宗大・二六一〇）^⑤

と記され、『国書総目録』によると、

釈浄土群疑論探要記考 十四巻 現存写本 大谷^⑥

と記され、大谷大学に『釈浄土群疑論探要記考』という名称の『釈浄土群疑論探要記』の末書が存在することが判明した。また、前述の『日本仏教典籍大事典』によると、『釈浄土群疑論探要記考』は、大正大学にも存在することが記されている。

そこで写本版本すべて実物にあたって、その実在の確認をしてみたい。まず大正大学図書館において、写本の『釈浄土群疑論探要記』を閲覧したところ、閲覧カードには、確かに「写本 群疑論探要記 一五三一―二七五」と記されていたのであるが、

実物は、『群疑論探要記卷之一二考』、『群疑論探要記卷三四之考』、『群疑論探要記卷五六七之考』、『群疑論探要記卷八九十之考』、『群疑論探要記卷十一二十三十四之考』という五冊からなるもので、内容は、『釈浄土群疑論探要記』の引用経論の典拠を明らかにすることを主とした『釈浄土群疑論探要記』の末書であった。これはまさに『日本仏教典籍大事典』、『仏書解説大辞典』、『国書総目録』に載っているところの『釈浄土群疑論探要記』に当たるものであることが判明したのである。『仏書解説大辞典』によると大谷大学に現存することになっているのであるが、大正大学にも現存していることが確認されたのである。よって、大正大学に現存するという『釈浄土群疑論探要記』の写本は、存在せず、『釈浄土群疑論探要記』の写本の間違いであったことが判明したのである。また、大正大学図書館には、写本で、『探要記考』という末書も現存し、閲覧したところ『釈浄土群疑論探要記』と、内容はまったく同じもので、冊数が二冊にまとめてあることだけが相違していることを知るに至ったのである。これによって、大正大学に『釈浄土群疑論探要記』と『探要記考』との同じ内容をもつ『釈浄土群疑論』の末書が二部存在することを確認することができたのである。そこで大谷大学所蔵の『釈浄土群疑論探要記』について考察してみよう。

大谷大学図書館において『釈浄土群疑論探要記』を閲覧したところ、現物の内容は、大正大学本とまったく同じ写本で、冊数が二冊にまとめてあることだけが相違していたのである。このことにより、『釈浄土群疑論探要記』は、大正大学と、大谷大学とに計三部の写本があり、筆跡は、それぞれ異なっていることから別々の人によって写されたものが残っていることが理解できるのである。したがって、『仏書解説大辞典』や『国書総目録』の記述に大正大学本二部のものがあり、また、『日本仏教典籍大辞典』の記述には『探要記考』のものがあろうということが判明したのである。

これ以外に『釈浄土群疑論探要記』の末書として『探要記条簡』一卷、著者不明なるものが存在することが知られているのである。残念ながら実物をまだ見ていないが、金子先生によると『釈浄土群疑論探要記』の項目見出しであるとされているのである。次に版本については、前述のように寛永十一年本と、寛永二十一年本と、宝暦十三年本との三種類が目録の上から認められるのである。そこで、大谷大学図書館において、寛永十一年本と見られる、登録ナンバー「宗大・一二九一四」の『釈浄土群疑論探要記』を閲覧したところによると、刊記は、他本と同じく寛永二十一年となっていたのである。なぜ記載に間違いがあったのか考察するならば、廿一という文字が草書体で書かれていたことから、廿一を十一と読み間違えたものであろうと推察することができるのである。したがって、寛永十一年版の『釈浄土群疑論探要記』は、存在

しないことが判明したのである。この結果から、これに基づいている『仏書解説大辞典』と『日本仏教典籍大辞典』との記述は、訂正する必要があるのである。

次に宝暦十三年本については佛教大学図書館書庫に直接入って調査をしたのであるが、その結果、残念ながら天一四八という版本は、実物を見ることはできなかったのである。そこで『浄土宗学関係書籍目録稿』とは別に図書館が独自に作った天性寺文庫目録を調査したところ、

『釈浄土群疑論探要記』十四巻道忠述寛永二一京都吉野屋権兵衛刊和十四冊二六
 纏（宝暦十三年大津光台院へ西村了順寄贈の印あり。）

と記されていたのである。このことから明らかにこの版本は、寛永二十一年版であり、誤って、括弧の部分を見て、宝暦十三年刊と書いたのであろうと考えられるのである。これによって、『浄土宗学関係書籍目録稿』には、誤った記載があることが判明した。

結局写本は存在せず、版本は寛永二十一年版一種類のみしか現実には存在しないことが理解することができたのである。貴重な資料にもかかわらず快く閲覧をお許しいただいた、大正大学の大谷旭雄教授、大谷大学の一色順心先生、また、不明の版本についてのご教示をいただいた、佛教大学図書館の藤室祐亨先生に、心から感謝の意を表する次第である。

註① 『日本仏教典籍大事典』二二八頁C—D（昭和六十一年刊）

② 『仏書解説大辞典』五卷一七頁C—D（昭和十年刊）

③ 『国書総目録』四卷二〇四頁D（昭和五十二年刊）

④ 佛教大学仏教文化研究所編『佛教大学図書館所蔵和漢書中浄土宗学関係書籍目録稿』三九頁B

⑤ 『仏書解説大辞典』五卷一七頁D

⑥ 『国書総目録』四卷二〇四頁D

⑦ 表題の下に祭道という記名があることも注目しなくてはならない。この記名から書写された年代を推定することができる可能性があるからである。大谷教授の説によると、江戸後期の写本である可能性が強いとのことであった。

⑧ 大正大学図書館登録 No. 1531—279—5

⑨ 大谷大学図書館登録 No. 内宗大—1033—2

⑩ 金子寛哉『群疑論』の註釈書について（『坪井俊映博士頌寿記念仏教文化論攷』三六九頁 昭和五十九年刊）

⑪ 佛教大学図書館天性寺文庫目録